沖縄における子ども食堂とコミュニティとの関係

2018 年度入学
1 LT18104G
社会学・地域福祉社会学
與那原周
2022 年 1 月提出

要約

貧困とは、もろもろの"溜め"が総合的に失われ、奪われている状態にあることを言う。金銭以外にも、自分に自信があるという「精神的な溜め」や、困った時に助けてくれる知り合いがいるという「人間関係の溜め」といった無形の溜めがあることも貧困状態に陥らない要因になり得る。「金銭的な溜め」「人間関係の溜め」「精神的な溜め」の 3 つの溜めを持つことで貧困状態から遠ざかる。本論文では、この溜めが沖縄の子ども食堂の困窮者支援にも該当するのか、しないのならばどこが噛み合わないのか、もしくはこれら 3 つ以外の溜めが存在するのかを考えていく。2 章では人間関係の溜めについて、沖縄の地元における関係を参与観察した 2 冊の先行研究からみていく。人間関係の溜めは当事者が選択して得たものでないと溜めになりにくい。地元の人間関係は特に閉鎖的な中で形作られ新たな人間関係を結びにくいことから溜めになるばかりか溜めを阻害するものに成り得る。3 章では沖縄県の貧困率とそれに準ずるデータから精神的な溜めと金銭的な溜めの視点から分析した。どちらにおいても既存の調査を二次分析する形で行い、4 章では、子ども食堂の基礎情報と沖縄県の子ども食堂についてまとめた。子ども食堂には子どもの貧困を解消する面と地域交流拠点としての 2 面があるが、前者ばかりが取り上げられ、子ども食堂と貧困のイメージが固く結びついてしまったことからそれを払拭する動きを載せた。5 章では聞き取り調査とアンケート質問紙をお借りした団体の概要、調査の概要と、インタビュー調査の概要をまとめた。6 章にては湯浅の溜めなる概念を用いて、子ども食堂の貧困解消的面である弁当配達について分析した。溜めは選択できる範囲を拡大する、総合的に失うと貧困状態に陥ってしまうものとした。金銭的な溜め、人間関係の溜め、精神的な溜めはそれぞれ該当する部分が発見された。溜めは沖縄県の子ども食堂の貧困対策においても適用されることがわかった。しかし、ここで時間が溜めに成り得るのではないかという疑問が浮上した。時間は子と親が共に過ごす時間や家族団らんの時間、個人が己自身のためだけに使用する時間が挙がったが、時間が生じる際は精神的な溜めも同時に存在することとなっていた。7 章の 1 節では時間をより詳細に分析することで溜めに成り得るのかを推し量ろうとしたが、時間は貧困層以外にも良い変化を与えることとなり、子ども食堂が貧困の解消以外の機能も持っているため、溜めには成り得ないとした。ただし、時間は必ずしも精神的な溜めを導くものでもないため、精神的な溜めが時間を内包することもない。2 節では子どもの居場所において自己肯定感を育むことの意義について述べた。利用する子どもとその親の両者に成功体験を繰り返させ、自信へと昇華することで、成功可能な範囲を拡大していくことができるとした。そして、3 節では子ども食堂と地域、子ども食堂とコミュニティの関係性について述べた。本論文で扱った 3 団体はそれぞれ地域内外の団体等と関りを持っていた。それぞれ比重は異なったものの、属する内側で子どもの居場所を位置する点は同様であった。しかし、「く

じら寺子屋」と「夢空間たんぽぽ」が地域の中で、継続を目的として存在するのに対し、「子どもの広場 in 那覇」は空間を飛び越えて、沖縄県民を 1 つにする「沖縄」というコミュニティの充実を目指し、コミュニティの構成員として弱さを保持し続ける。